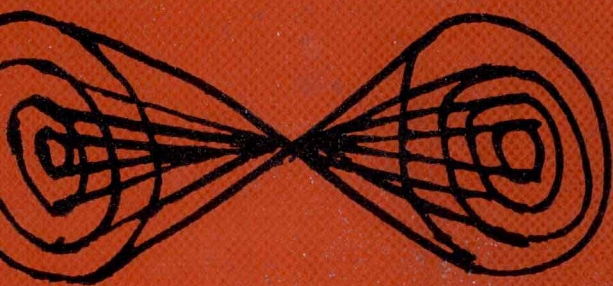


マモデ
ーユ
ルリア
ロア
ツメ
オクル



世界文學大系

59

デュアメル

天上生活回想

モーリアック

蝮のからみあい
小説について

マルロオ

西欧の誘惑
征服者

室井庸一・鈴木健郎・川口篤
小松清・松浪信三郎 訳

世界文学大系

59

筑摩書房版

世界文学大系 59

デュアメル

モーリアック

マルロオ

昭和 36 年 4 月 20 日発行

定価 450 円

訳者代表 小 松 清

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2 の 3
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

デュアメル

天上生活回想

モーリアック

蝮のからみあい

小説について

マルロオ

西欧の誘惑

征服者

室井庸一訳
5

鈴木健郎訳
77

川口篤訳
169

小松清訳
201

小松清訳
237

年 譜	解 説	ア ン ド レ ・ マ ル ロ オ	フ ラ ン ソ ワ ・ モ ー リ ア ツ ク	ジ ョ ル ジ ュ ・ デ ュ ア メ ル
	白 井 浩 司	白 井 浩 司 訳	G ・ ピ コ ン 訳 藤 林 真 朔 訳	平 井 啓 之 訳 P ・ H ・ シ モ ン
390	383	377	371	366

デ
ュ
ア
メ
ル

天上生活回想

I

規則正しく、おだやかで、莊重な、このゆれぐあい、ほかでもない、大西洋の赤道地帯を航海しているうちに、船舶がおそれるといういつたえの、あのゆれぐあいにそっくりだった。それは貿易風、一つ一つの波の頭から一群の飛魚をむしりとる魔術師のような風をおこす動きだった。

この旅人は若いころ、西インド諸島までぶじに航海したことがあったのである。彼は、ゆっくりその思い出を玩味してつぶやいた。《何も忘れてやしないぞ。こりやしめた。みんなおぼえている……》

水晶色の影のさなかに、彼はいましも腕をのばした。そしてこうつぶやいた。《痛みはいつもここにあった。うん、われながらみじめなからだめの痛みだったわい。けれど、この感じはもう痛みではないぞ。この感じは、いまじやまるで、回復してらくになったのを知らせてくれるようにしているようなものだ。痛んだ場所に覚

えはあるが、どうやら痛みという記憶や觀念にとつかわられていいるわい。結局、ほっとして気がらくになったというものだ。これこそほかの、死ぬ番がまわってくるのを地上で観念している連中にも、ぜひとも説明して納得させなくてはならんことだ》

うつらうつらここまで考えてきて、旅人が手をのばすと、何かしら手ごたえのあるものにつぎあたった。それは壁のようなものだった。壁や仕切りのような堅さをもつてはいたが、壁にしては弾力もあり、撓^{しな}やかでもあった。《なんと変わった建築用材だ、と建築家の義兄ならいうところだな!》と旅人は思うのだったが、とたんに生真面目に狼狽^{うろた}して、影のなかで苦笑しながらいいなおした。《いかん! いかん! こういうわななくちゃ……なんと変わった無形用材だ!》

動揺は、支障もなくまことにしっくりとつづいており、旅人は、またおぼろげな夢想にふけていた。彼は、ある名前をささやいては、耳をかたむけるのだった。自分の名前である。それは地味な、とはいえ結局、世間の人びとのなかから彼をはっきり区別してくれていた明瞭な数音節だった。《マーニボワ! セバステイヤン・マーニボワ!》彼はうつとりのその名を十度あまりもくり返した。まるで、その名前を紛失したわけではないことや、その名前からたえずよろこびを汲んでいることを確かめたいためでもあるかのように。それから寝台の用を足し

ているものの上で、二、三度寝返りをうつては、よろこんでこうつぶやくのだった。《なんていい気持だ! なんてしあわせなことだ! これはどうもあたりまえじゃない! ああ! たしかに、絶対にあたりまえじゃないな。きつといまに何か起こるぞ。いや、いや! シローエは、そんなことはないって百べんも保証してくれた。私には何も起こりやしないはずなんだ。偶然も自動的な事故も、火災も難破もここでは起こりやしないんだ! 心臓の呪わしい発作にも心配はいりやしない! それどころかえって、あわれなフレデリックも、もう二度とは死にはしないんだ、かえってな! これはすばらしい。この安堵の気持は! あんまりすばらしくて、そんな資格が立派にあるなぞとは思えない》

彼は、こよなく熱烈な祈りの口調で、こう言葉をつづけるのだった。《いえ、いえ、主よ、なんどでもいわせてください。ご親切がすぎました、と。私は救っていただきました。それはいかにもそうでございます。けれど、苛責^{しやうさく}から解放されてはおりました。かわいそうなりすベットの身の上をすっかり忘れるには、まだまだひまがかかるとございましょう。彼女は私を許し、あなたも私を許してくれました。それはよくわかっております。けれど、どうかわれとわが身を許すまでは、ほっておいてください。彼女は救われました。私はよく存じています。でも、それで私が、罪の感情から解放されるわけ

にはまいりませぬ。主よ、あなたが私をこういうふうにおつくりになったのです。たぶん、すべてはどうなるか決定されていて、それともいわば正式に決定されていますのでしように、それでも私はよくよしております、お許しください。すばらしい寛大なみころから、許してやろうとお思いになっていられるもろもろの私の罪を、私がまだわが身に許さずにいますことをお許しください。それでも、主よ、自分のことは自分のほうが、少しはよく存じております。……さて、重大なことを申しあげねばなりません。お許しください！ お許しください！ ころう申しますのは、おお、生きとし生ける悩めるものたちの御父よ！ 私の氣持としましては、とくに自分自身に対してなのですが、あなたのように寛大な、あなたのように広量なみころは、とても持てないのでございます。もうしばらくのあいだ、私にみずから鞭打たせてください。妹とのあの争いにおいても、非はかならずしもぜんぶ彼女のほうにあったわけではございません。それは私も知っております、あんまり知りすぎているくらいでございます。……しかも私は、こうしたすべての事情にもかかわらず、フレデリックが試験のあとで申しましたように、合格したわけでございます。この氣も顛倒する成功に、私が慣れませぬのもまことに当然でございます。……きつと私はもう眠れますまい。なんとという驚き、なんとという思いがけぬことでございます！ おまえは死んでから

も眠ったり起きたり、昼を迎えたり、くつろいだ夜を楽しんだりしつづけるのだ、なぞと私にいつてくれたひとがありましたるか！ なんという意外なりゆきでしよう！」

こうして冥府讚美をやるかやらぬかに、旅人はすぐ考えた、《はつきりとものを見たいな、光が見たいな》と。

するとほとんどすぐに、どこからとも見分かず、むらのない、おだやかな青味がかった白光が小部屋いっぱいに拡がった。《神は讀むべきかな！》とセバステイアンは大きな嘆息をされた。《すばらしい！ すばらしい！ いっそおみごととでも申したいところですが、控えておきます。それではあまりになれしすぎでしょう。いまでは私も、かつてル・ブラン氏が高尚な様式と呼んだものになしまねばなりません！で、すばらしい、と私は申しあげます！ 實際の話、私がこで見ているものは、学者たちが想像のうちに創りだそうと夢みたもの、そして時には創りだしたもののなのです。すなわち望みどおりの光、ほしだけの熱、そして聞きたいままに音楽を。残念ながら地上では、すべては脆弱で傷つきやすうございます。すべてが、信じられぬほどあっさり中途でだめになり、調子が狂ってしまうのです。たとえば鋳鉛術です。……彼らの鉛細工ときたら、なんとあわれなことでしょう！ これはしたり！ 私はどうかしています。こんな驚嘆すべき瞬間に鉛細工の話など考えたり、しゃべったりすると

は。もういちど、お許しください！

シローエがいましたように、私は全生活を、真実の生活の全部を、ご有想を乞うのに費してしまふのではないかと、はなはだ怖れております。なんと申し分ない身の上なのでしよう！

なんとすべてが快いことでしよう！ ひどい目にあったら思い出す、そのために苦しまないではおられませぬはずなのに、おだやかな、ほとんど甘美なものになっております。げんにはんのさつきから、ジルベルトのことを、とてもやさしい氣持で静かに回想しているのです。いちばん驚いておりますことは、どうも私は、彼女のことを考えるとかならず、地上の暮しにつきもののいろいろな氣づかいで、はらはらしながら思いやってしまうらしいことです、あの性悪な女のことを！ もしシローエが、まえもってくだいほど知らせておくれませんでしたなら、私はおかげで、こりや氣は確かなのかたと首をひねったことでしよう。シローエはどこにいるのかしら？ 私の新生活の伴侶は？ 私をこんなにひとっぽちにしておいて見すてたまま、とびな考えにふけらせておいたりしてよいものか？ シローエよ、どうしたらあなたのもとにいつて、私のところまで連れてこられるのかしらん？」

こうあとからあとから考えていると、たちまち、すぐそばでふきだす声がきこえた。飛び上がったセバステイアンが寝台をふりむくと、シローエがそばに坐っていたのだった。セバステ

イヤンは、これまで一度も、シローエがどんな風体で現われるか、どんな服装、どんな態度で現われるか、予想の当たったためしなかった。いつも一人の同じ人物なのに、彼を驚かせもし、また心やすくも思わせるのだった。いつも同じ眼差、同じ声音、同じ魂を持っていたが、時には牝羊たちから別れてきたばかりの牧人のような表情になり、また時としては、ハンマーの響きや鉄鎚の動きから脱けだしてきたばかりの職人のようなものごし服装だった。また時には、甲冑に身を固めた戦士のように、昂然として近寄り、たく輝いていた。さてこの日は、ゴルフ選手が身につける服装そっくりの出立ちでやさしく笑っているの、セバステイヤンはびっくりしてしまった。白い靴下に、濃いオレンジ色のやわらかいスリッパを履き、淡紅色のネクタイをして、ボタン穴には、何とは知れず芳香のある花を挿していた。表情は女性のように優雅であり、極地探險者のそのように勇氣にあふれてもおり、まだ一度も少女を意識しない少年のように清らかでもあった。彼はこうえなく豊かな、響き美しいフランス語をやすやすとあやつった。彼に会うと、誰しも彼と遊びたがり生涯にわたる友人になりたがりたりするのだったし、いっしょに仕事をしたり、苦勞をわけあったりしようとか、よろこんでばかりいないで苦しみなさい、いろいろ計画を立てなさい、旅行の支度をしなさいなぞといったがった。彼の類はピロードのようにすべすべしているの、

人びとは味だめしに指の腹でちよいとつつきたくなるのだった。とはいえシローエは、ときおりこの友人に、静かな、しみいるような視線をじつとそそぐの、セバステイヤン・マーニボワは、たちまち盲人のように両のまぶたを閉じるのだった。それは、地上生活の遍歴者たちがいつも空しく求めているもの、すなわち、この生きいきとした若者のなかに英知がきつちりつまって成熟しているという感じを、そのたびに味わうからなのである。

「さあ起きなさい！」とこの優雅な友人はさげすんだ。「私たちは広間を訪問にゆくのです。道具を、きみの考えや望みや、これからのものくろみをお聞きしましょう」

「おお！（とセバステイヤンは謙虚な微笑を浮かべてつぶやいた）私に関する事柄はみな、あなたのほうがよくご存じじゃありませんか？」

「大きにそうかもしれないね。けれども、自分でもっと完全にのみこむために、きみ自身でいいあらわしてみるのがよいです。神は、天地の生きとし生けるものに、自分の望みはみずから理解できるように、そしてそれを言葉で限定できるように、第一の永遠、すなわちフティ永遠の期間に、祈りを考えだされたのです。さあ起きなさい、セバステイヤン！ ああ、きみは鏡をさがしているんですね！」

「ごめんなさい、（とセバステイヤンは口ごもりながらいった）これは昔からの習慣なん

す」

「そりやそうでしょうとも。しかし、ここではとても簡単です。きみの必要に応じて何でも鏡になるのですよ。仕切りをこらんなさい、きみのほしいものは何でも与えてくれますよ」

セバステイヤンはいささか狼狽して頭を上げ、仕切りをながめた。すると、五月におこった恐ろしい出来事の少しまえに自分でなめることのできたとおりの自分が映っているのだった。

……中背で、灰色の髪がうすまき、ひげを剃りたての正直そうな顔に眼鏡をかけ、近眼で、せんさく好きな、固執癖のある眼差を持っている。「でも、でも、（と彼はいった）傷が見えませんが」

「そのとおり。ここにいるのは負傷以前のきみなのです。ここには、結婚当時の若々しい顔になったと信じている人びともいます。もういちど子供の顔に戻りたがった人びともおりまして、また、別の連中が、いちばん体力きかんだったころ、世間的にも自分自身にたいしても勝利の日々だったころに、ふたえたり返るつもりでいたために、少々失望したものもいます。きみたちは誰一人、全生活経験が無効にされたり軽減されたりすることのありえないように、今では御父がおきめになりました。御父は、その大いなる知恵によって、死期にうけた畸型や負傷は例外となされました。ただ殉教者と兵士だけは、最後の試練にうけた傷のある身で出頭する権利を持っているのです。さてセバステイヤ

ン、きみはここでは五十五歳なのですよ」

「苦しさが、何もかもやっとな消え失せて、そのかわりふしぎな、気も顛倒するほどの安楽な気持ちになりました」

「そうですね。いっただったかきみはいいませんでしたか、きみたち人間にとっては、地上生活のあいだは、苦しみのないのはいちばんうらやましい、いちばん大切なよろこびだと？ さあ、それではでかけましょうよ。広間の揺れぐあいはお気にめしますか？」

「うっとりします。私は昔、船旅をしたことがありますけれど、よく酔ったものです。ところが、この揺れぐあいはいかにも天上のものですね」

こんなふうのうちとけた話をしながら、二人の旅人は廊下を歩きはじめたが、それは、人たちのつくった最大の巨船の廊下に似て、しかもはるかに荘厳なものだった。どこからとも知れず射しこんで流れ動く明るさが、曲り角やすみずみまでも満たしていた。通路には、歌をうたったり、仲好く話したりしている声がきこえた。ときおり、大きいがおだやかな笑い声が仕切りをふるわせた。二人の旅人は人びとにであいはじめた。はじめは不安な、懸念さへおびた軽いあいさつがかわされた。広間の旅客たちはめいめい、とりわけ熱心に、他人の生活や自由を尊重しようとしているらしかった。通路では誰もが、微笑したり、頭やまぶた、さては小鼻をちよつと動かして合図をしたりするのだった。

「シローエ、（とセバステイアンはささやいた）いったいなぜ、私は一人きりの部屋でこのうとできたのです？ 幸運なわけなのでしょう？ それなら、私にはけっしてその資格がないのですのに？ それとも孤立させ、罰するための処置でしょうか？ もしそうだとすると、この処置は、それを命じた意志とは逆な効果を生むことにもなりかねませんね。だって私には、かえって気持がいいんですから」

シローエは唇に指をあてて、沈黙の合図をしていた。

「しっ！（と彼はいった）これからはけっしてそんな子供っぽい当て推量にふけてはいけませんよ。広間にも、それにこれから私たちの行くところにも、やはりお国の人びとの部屋があるのです、フランス人たちのね。なぜって、彼らは特別扱いがすぎ。ひっこもっているのがすぎ。ひとりでいるのがすぎなんですからね。

しかし、たとえば話しすぎなロシア人たちは、共同寝室で旅しますよ。ですから、もしきみが彼らといっしょにいたければ、それはもうまったくきみの自由です。どうしました、セバステイアン。うっとりしていますね？」

「ええ、この花を見ているのです。これは花なんですしょうね？ なんともいえない気がしますね、見ていると目がくらくらして、まるで酔ったようなうれしさでいっぱいです。いったいなという花なんですか？」

「よくごらんさない。（とシローエはいった）

見て、なっとくなさるんですよ」

二人の旅人は中甲板の大広間にきていたのだった。その壁には、人間生活を描いた絵画、すなわち田園や、収穫物や、都市や、雪のように白い帆をはった小舟のうかんでいる碧瑠璃の入り海や、湯気の立ちのぼっている食卓にあつまつた家族や、歌をうたっているおおぜいの人びとや、瞑想にふける苦行者たちを描いた、深い安静にみちた絵画がかけられていた。空間の中央には高いびんがたっていて、そのなかには、ゆりに似てはるかに大きく、はるかに高貴で、輝きをはなっている白い花がさされていた。それは光と香気を同時にはなっているのだった。

「ここに残ってひざまずいていたい」とセバステイアンはいった。

「なるほど、大いにけっこうですな！ しかし、昇ってゆきましよう。ラッパの音がきこえますか？」

「甘美でしかも気高くて、親しみもあるのに、それでいて威圧的な音楽ですね。もう少しきいていたい」

「世紀を経るにつれて、ますますなんともきかれますし、それだけよいすきにもなりましよう。時間はいくらでもあることですよ、きみ。さあ、私の手をにぎりなさい」

「ねえ、このめずらしい金剛石はなんというのですか？」

「近よってごらんさない、セバステイアン。おそれることはありません。その石に手をおいて、

さて自分の手をごらんなさい。手をふってごらんなさい」

「手が、まるででもえる炎のようです。まぶしい微光をはなっています。この手を空中にかざしたら、一晩じゅう灯台のように照らしつづけて、まよいこんだ航海者たちをみちびくこともできそうです。私が手をにぎると、光のしずくが落ちますよ」

「いらつしやい、セバステイアン。まもなく無限にひろがった天の景観が見えますよ。ごらんなさい、私たちは広間の甲板の上にいるのです」「ねえ、シローエ。白い衣をつけたあの若い水手は誰ですか？ あのひとが通りすがりにちらちら私を見ると、私は気絶したみたいになってしまいます。あのひとは、私が若いころに、いちばん美しい夢のなかでみたような美しさだ。ながくみつめられたら、幸福のあまりに死んでしまいそうな気がします」

「あのひとはこれから、かぞえられぬほどありますよ。これが手始めにすぎません。ごらんなさい！ ごらんなさい！ ほら、天が、上にも、下にも、右にも左にもありますよ。甲板の横ゆれ縦ゆれがちよと強くなりましたが、これはいま、ミラボゼの郵便船と交又したところだからです」

「ミラボゼってなんですか？」

「第三週期の遊星です」

「ミラボゼなんてしりません」

「人間の目に入ったことのない遊星は四十億ば

かりもありますよ。ながめながら、私といっしょにまいりましょう。もし、あまりの壮観に酔いそうで心配なら、私の手をにぎりなさい。私の腕をにぎりなさい。よりかかってもよござんす。あの小さい金色の星をごらんなさい。下のほうです、空のすっきり奥にあるでしょう？ あの星をご存じですか？ あれが太陽です」

「太陽！ 私たちの太陽！ そんなことがあるかしら？ いや地球はどこにあります？ もう二度と地球をみられないんでしょうか？」

「精神と心情をはたらかせて地球をみるすべをお教えしましょう。そうすれば、いつかとつぜん身近かにみられるでしょう、ちょうど夏の日に、丘の高みからやすやすと見下ろすようにはつきりとね」

「シローエ、私はどこにいるんでしょう？」

「私たちは大いなる銀河を横切っているのです。地上では天の川と呼んでいますね」

「私たちのすぐそばを通りすぎかけている、毛髪のある星はなんですか？ あれにさわれないかしらん？」

「さわって、なでてごらんなさい。それから手をふってごらんなさい。そこから真珠のような三千もの星屑が落ちますよ」

「シローエ、しばらく星座をおおっているあの雲はなんというんでしょう？ 私はおびえてしまっています。しかしあの雲はすばらしいなあ、ふしぎな光でいっぱいだ。時には仔羊のように見えるし、また時としては鳩のようだ。たえず

何かになり、また変化してゆく。なごやかな風のそよぎ、萌えでる春の若草を吹く微風のそよぎにもた声で、私に話しかけようとしているようです。あの雲はなんと美しいのです！」

「あの雲にお願いしてごらんなさい、セバステイアン、そうすればきっとあの雲が、香りゆたかな雨を私たちにふらししてくれるでしょう。たぶん永遠の沈黙のさなから語りだしもするでしょう」

「ねえ、（とセバステイアンは嘆息するのだった）どうもおそろしくなりました。急に、とてもおそろしくなってきました。いまは、私にとつて、神におあいしてひれふす瞬間なのではないでしょうか？」

「きみは、（とシローエは答えた）なんとなく神を見てきたばかりなのに、なぜ神を見たいなぞといいだすのですか？」

「気づかぬうちに神を見たのですって？ ああ、なんと私はたよりない、幸福になる資格のない男なのでしょう！ どうかひざまずかせてください。シローエ、低劣さからすっかりぬけだすようにひき上げてください。さてはこの、光と香気をふりまいている花が神なのかしらん：」

「そう、その花です！ そして崇高な金剛石や、雲や、白衣の水手や、輝く毛髪をつけた彗星でもあります。いいですかセバステイアン、地上同様にまでも、またこれからだって、何か美し

いものを見て心がとろけ、指がふるえるようなときは、いつでも神をみているのです、すなわち神のものなるなにかを、ね」

「しかし、おそれやよろこびで命絶えずに、もういちど申しますが不可抗の死にいたることなく、神に面とむかつてその莊嚴の全貌に相まみえる権利が、私たちの誰にありましよう？」

「誰でもです、みんなです！ 広間の第一甲板の上の、私たちの周囲を歩いているすべての人びとが、したしく神に面接するでしょうし、神は、彼らがその面接に馴れるようにと、髪飾りになさる貴金屬や、マントの糸や、翼の鱗や、光輪から出る光線を、たえず広場の前方に落ちるにまかせておられるのです。まったく、なんでも美しいものはみな神性をおびているのだということをわすれてはなりません。かしこ、地上でも、あなたに美しいとみえたのは、みな神でした」

「ほんとうですかしら？ ほんの単純なものでも？」

「とりわけ単純なものね」

「おシローエ、嬰兒でもですか？」

「いかにも。嬰兒はそうです！ 心ただし人間が、地上の生活で三度四度と神を知覚するのは、嬰兒のまつげのあいだでこそです」

「ですけど、ねえ、私が生きていたとき……」

「おだまりなさい、おだまりなさい。今ほどあなたが生きていたときはなかったのです」

「それじゃ、私の地上生活をかたるには、『私

が死んでいたとき』とでもいわなくちゃならないんですか？」

シローエは笑いだした。その若々しく新鮮な声音は、旅人のセバステイアンを一杯の強精酒のように強め、安堵させ、力づけるのだった。

「いまこそきみは、（とシローエはうたうようにいった）生命を知りてゐるのです。これにはただ、ふんだんな努力と勤勉だけがいるのですよ。永遠をかちとるのは、のんきな仕事じゃありませんよ。とこできみは生前の生活をいつか私に話してくれましたからね、きみの最初の生活を……」

「ええ、（とセバステイアンはうっとりつぶやくのだった）あの最初の生活のあいだじゅう、七月の、麦におおわれた広い田野を散歩したり、ぶどう棚の下で休息したりするのがとても好きでした。あんな甘美で美しいものはほかにないように思われたものでした」

「そのとき、神を見たとはさとりませんでしたか？」

「小麦の畑……ぶどうの影……そんな素朴な美しさに？」

「やれやれ！（と笑いながらシローエはいった）恩知らずですな！ いったいきみはなにを夢みていたんでしような、赤ん坊さん？ パンもお酒も忘れていたのですか？」

セバステイアンは顔をふせた。彼はせきこんでしゃべりだした。

「ごめんなさい、ごめんなさい！ 私には幸福

をうける資格がありません。ごめんなさい！ 謙虚になろうと思ひながらも、できやしないのです。大地にひれふそうにも、もうその大地もないのです。下界のほうをながめたいと思ひますが、見えるものはといえばやはり、広間の甲板ごしに、天空や、かげもない星々、銀色の星雲、それから、聖者や殉教者の額のように光輪に囲まれた星々なのですね。ゆるしてください！ 私はパンも酒も忘れていました！ それこそ千度も神を見たのを失念していたのです」

シローエは心から笑って、人差指で愛嬌たっぷりにおどかすのだった。

「よろしいか、（と彼はいった）目下、きみたち地球上の人びとの太陽の三百万倍も大きな太陽のそばを通過しかけていますよ。いまに大波がたちましよう」

「そんなふうに私は、（とセバステイアンはつぶやいた）大きな純潔な鳥や、生きいきとした魚や、ぶんぶんうなる昆虫や、青い草花をみていたものでした。……じつさい、私はそういうもののことを、すこしは考えてみるべきでしたのに。どうかあなた、ゆるしてください。けれど私は、あのみじめな地上で、なすべきことがほんとうに多すぎたのです。不安や仕事が多すぎたのです。それから無用の書類です。やれやれ！ 無数の、しわくちやの反古類をつくったのでした。どうして自分の魂のことなど考えられませんでしたろう？ どうして神について考えたりできませんでしたろう？ ああふしぎな音はなんです

か？」

「あれは旅客たちの合唱です。天上のこの地点まできますと、みながうたいはじめるわけですから、あの高い場所で待っている第一期の天上人たちが、私たちの近づくのを知って受入れ準備にかかるわけです」

「私もうたいたいくなりましたが、（とセバステイアンは嘆くのだった）私は昔からこれっぽちも音楽の才がないのです」

シローエは人差指の先で旅人のかなしげな頬をついた。

「ただ口をあけて、（と彼はささやいた）神様のことを考えなさい。そうすれば、歌が生まれます。いつだってそうなのですよ」

セバステイアンは口をあけてうたった。シローエは、親しげな笑いをうかべて彼をながめた。ときおりは手をあげて拍子をとった。

「こりやすてきだ！（とセバステイアンは呼吸の合間に、無邪気なほこらしさでいうのだった）まるで私は、アルデバラン星や狼星にも聞こえているにちがいないといった気持ちになります」

「地上にはきつと聞こえているでしょう。まあ考えてごらんない、セバステイアン。きみたは旅仲間、あやうく出発しそこなわずにすんだ六人の遅参者を含めて、七千三百七十三人いるのですよ。六人の連中は、首天使アビアが綱にからげたのです。やあ、やあ、歌い声が静まりましたな。なにをしているのです？ セバス

ティアン」

旅人はいましも親しげな手ぶりで、甲板の欄ごしに手をのぼしていた。彼は、ぎょうてんしたようにいうのだった。

「こんなことであるかしらん？ 雨が降っているらしいけど」

「降ってますとも！ たしかにそのとおり」

「でも、（と旅人はいった）私は、ここで、天上の無限の空間の奥で、雨にあうなんて、私の国の小雨にあうなんて、夢にも信じられなかったのです。降っている！ 間違いつこない！」

「これには長いきさつがあるのです。（とシローエは答えた）最初の二つの永遠、フティ永遠とクネ永遠の期間、そしてヴィドク永遠の初めですが、天国にはけっして雨はふらなかつたものです。当時、至福者たちはぶつぷつ不平をいいながら住んでいました。ええ、内氣に、うやうやしい態度で不平をいいながら。でも不平をこぼしてはいたのです。まことに親切な御父、万事を理解される御父は、ああ！ 周辺の四つの球体だけに、とくに雨をおつくりになったのでした」

シローエは、おごそかなそぶりで、小さきみにうなずきながらいうのだった。

「きみが地上生活から離れるには、いかにもない時間がかかります。少数の人びとだけが、それも何世紀も何世紀もたつてからですが、完全に地上の習慣を離脱するのは、それでまあ、御父に対面して話をする、急に思いもか

けないことをしゃべりだします。曠野の悪路のこと、人家の炊煙、夜の虫の鳴き声、白樺の枝を吹く風のことなんぞをしゃべるのです。しかも彼らは天国にきて何千年も、それ以上もたっているのですからね！ 神の永遠の光で身心脱落できるまでには時間がかかります、とてもながい時間が必要なのです。僅々二十年の地上生活が、二つも三つもの永遠を通じて記憶にのこっているのです。ことに詩人は手におえませんが、彼らはけっして完全に非人格化するようにはありません。時には御父の外套の上にすわって、わけのわからぬ言葉で、うたいはじめたりしますが、それは天地創造のはじめにおられた首天使たちしか理解できないものです。……なにを見ているんです、セバステイアン？ 足がふらふらしているようじゃありませんか？」

「シローエ、私はいつまでもあなたに心配をかけたなり気をわるくさせたりはしないつもりですよ」

「お話しなさい、（と照り輝く伴侶はいうのだった）きみの頭にうかんだ考えは、なんでもかくさずお話しなさい」

「もういちど、ごめんなさい。私はきつと疲れているのにちがいありません」

「腕をかしなさい。もう一度広間のずつと下におりてまいりましょう」

セバステイアンはシローエの腕をとって、天上の光明や微光をあびている梯子段を下りはじめた。

「これはふしぎ、(と旅人は嘆息した) 光線が私をはこんでくれる、それにつれてつかれをいやし、酔い心地にさせてくれます」

「心配いりません、御父は万事に気をくばっておられる。優柔不断の魂たちが、とほうにくれてしまわぬために、彼らは昼と夜を迎えます。ここにも夜が存在してよいと、御父はみとめられたのです。地上同様にね! 新しく到来した人びとだけのためにですがね。もうすこしすれば、きみは永遠の光に馴れて、平気になるでしょう」

「永遠の光? 死者への祈りのなかで人びとのいう、あの永遠の光が、私たちのいるところに?」

「いかにも、同じ光がです。もう少ししたら、いつからかきみはもう、夜を迎えることもなくなるのですが、それは必要がなくなるからで、それでこそ完全に天上の住人になった、永遠の光のうちに客となったというこなのです。その日を待ちながら、甘美な闇に休息を味わうがよろしい、幸福ながらに苦しんでいるかわいそうなひとよ。おやすみなさい。きみがほんの子供のころ、お母さんがしてあげたように、きみをかばい、かこってあげましょう」

セバステイアンはふるえながら寝台の上に身をのびした。彼は嘆息するのだった。

「よい気持です。けれど、天国の夜は最初からあったのですか?」

「いいえ、やっと第三の永遠、きわめて有名な

ある大天使を記念してここではヴィドク永遠と呼ばれていますが、そこから始まるのです。そうです、第三永遠のはじめに至福者たちが、ほんの少しばかり夜を要求して嘆願したのでした」

「それでは、至福者でもやはり要求はするのですね?」

「もちろんです! 彼らはいつもの何か要求しています。そこで、御父は結局、いつもととはかぎりませんが、譲歩なさるのです。御父はとても親切なのです!」

「なるほど! では、ご意見を変えることがあるのですね?」

「いうまでもありません。でなければ、なぜきみたちは祈るのです?」

セバステイアンは静かに胸を動かしはじめた。眠りに入りはしたが周囲に関心を失ってしまうまでにはならない男のように、まぶたをなかにばとじているのだった。

「神が、悪しき精神の持ち主たちをもうけいれられるというのは、(と彼は口をもぐもぐさせた) ほんとうでしようかしら?」

「そうですとも、ときにはね。神は彼らのおぞましい言葉をきかれますが、しかも斟酌なされることさえるのです。おお! ただ彼らを当惑混乱させるだけなのに。ヨブの問題に関するサタンの誘惑を思いだしてください。悪魔の王に対する御父の言葉を思いだしてください。『汝³われを勧めて故なきに彼を打ち悩まされ

ぬ』試練というものがあからこそ、勝利というものもまた、あるのです」

「ときにねえあなた、彼にはあえるんでしょうか?」

「誰にですか?」

「ヨブ、老いたるヨブにです」

「たしかに、非常な老人ですが、やっぱり口論争議をこのんでいます、あたらしく天上にやってきた人びととさえね。レヴィヤタンのことをしゃべらせてごらん下さい。この問題には驚くほど精通しています」

母親の腕にいだかれて眠りに入る子供のようにな、旅人の声は、だんだん低く、低くなりながら、自分の伴侶を正当な名前前でよびながら、なおも口をきくのだった。

「私の天使さん。私は、この世に生をうけていい、ずっとあなたを知っているような気がしますよ」

「ええ、ええ、そうですとも。私はきみからはなれたことはありませんとも。きみの地上におけるすべての試練を通じて、そばにいましたよ。きみが罪を犯した時だけは身をさけましたけれど、その時、きみは自分で恥じ入っていましたね。子供さんのフレデリックが病気になるまで、死ぬまでのあいだも、昼となく夜となくきみのそばにいました。きみの生まれた町の被爆さいちゅう、きみが地上を去ったときにも、廃墟になったきみの家の下に、きみといっしょにいたのですよ。そして、いまこそいちばん身近か

にいるわけです」

「なにがなんだか、(と旅人はいった) あなたのような精神の持ち主が、私みたいなみじめきわまる男に身をささげようと考えられておられると思うと、まごついてしまいます」

「べつにまごついたりする必要はないのですよ。気持の疲れたひと、救われたひとよ。さっききみは、広間にはいつて航海しているひとたちに会いましたね。そして、彼らはきみといっしょに合唱しましたね。あのひとたちはみな、一人ずつ私とおなじような天使たちに付き添われているのですよ」

「そんなことがあるものでしょうか？ ちっとも気づきませんでしたけど」

「だんだん、私たちを見たり知ったりするすべをまなぶのです。天上でもまた、長い教育を必要とするのですよ」

セバステイアンは夢みるように声高にささやきはじめた。彼は、大きな嘆息をもらしながらいった。(ああ！ 天上人が疲れをしらぬことはわかる。むしろ……なんといおうかな？ 疲れを感じないことにつかれてしまった。天使さん、最愛の天使さん、私はあたらしい幸福に休息する必要があるようです。いっそう元気になる、正面から幸福をながめ、だきしめ、あたらしく味わうことができるためには、しばらく幸福から身をそらす必要があるようです。お願いですから、もう一度、死亡状況を思い出させてください。死亡って、出発という意味なん

です。ほんとうに、なんの準備もしていませんでした。近親者に囲まれながら、美しいしずかな死を寝台の上でとげようとねがっていたのです。ごめんなさいね」

シローエは、また笑って人差指をあげ、旅人の額におくと、たちまち相手はねむりこんだ。

大船は、永遠の空間の波上をゆっくりゆれつづけていた。小部屋のかなから光がすこしずつきえていった。旅人はまた片目をあけて、灯火のついたひととき、いみじくも驚嘆すべき夜景をながめた。シローエはもういちど衣服をあらためたばかりだったが、それにはほんのちよつとした動作もいらなかった。もはやオックスフォード出の紳士のような、格子縞のスコッチ織三つ揃いでなく、美しい長い白衣をまとった。旅人は疲労におそわれてふたたび目をとじた。すると天使シローエは、やさしく、やさしく、音をたてずに、彼の衣のひだから、綿毛のようなものに覆われ、ビロードのようになめらかな翼を、長く、長く出して、それからゆくりと、平均した、規則だしい、母親のような動作で、眠りこんだ旅人の顔をあおぎはじめるのだった。

Ⅰ

天使ユリエルはおりをみて自分の大長靴をぬいだ。しばしば聖ミシエルの名でよばれてきたのは、この一足の靴あつてこそなのだった。こ

の天使は、竜とたたかって勝利を得た有名な日にこれを着用してはやらせたのだったから。長靴は、腿までとどいている。一角獣の最上の皮で裁たれていて、四千年はもつものであり、星の旅には瑠璃色に、夜の旅にはサファイア色にいろどられてみえるのだった。

さて、長い旅をすませてきたばかりのユリエルは上着をぬぎ、完全浄化のために心中で祈念した。するとたちまち、えもいえない三種の驟雨が身にふりそそぐのだった。一つはばら色の、一つは乳色の、一つは琥珀色の水だった。微笑を浮かべ、心さわやかになった天使は、いまや紫水晶で細くふちどられた白い翼をひろげた。

この縁取りは、彼の所属している仕事、つまり人間たちの事件をあつかう仕事を明示しているものなのである。彼は翼をひろげて、いわゆる「崇敬の飛翔」をおこなった。これは、人間たちの上にうつろう空のなかでひばりがやっているように、高みにあつてうたいながら、ほとんど身をうごかさずにいるしぐさなのである。天使は、やつと宮殿の高さにふたたび降下して腰をおろした。彼はまるでひげの生えはじめない少年のように、ばら色で、無垢な感じだったが、額に嚴肅なけいがあり、たえず低い声音をたてながら、学課を忘れまいとする生徒のように、いろいろの名前だの、引用句だの、慣用句だの、民数紀だのをくりかえしていた。彼は高からず低からぬ声音で、こうよんだ。

「ゾロバベル！」

それは御父の衛門天使で、この称呼を、世のはじめ以来つづけていたが、それというのも彼が、驚くべき聡明な精神を持っており、創造のいきさつをすべて知っていて、一目で諸生物の名を正確に指示し、それらを検閲したり審問したりするにも、かたつむりの魂とみそさざいの魂を混同したりはしないからだった。ゾロバベルは大門の幕をまき上げてあらわれた。

「これはこれは、ユリエル！（彼はさげんだ）こんなに早く帰るとは思わなかったよ」

「おお！（と旅する天使は、とがめだてするような口調でこたえた）そんなことがあるものか？ こんどの私は、いつもよりはるかに長期間、地上に滞在していたのに。すくなくとも人間たちの七十五年か八十年はな」

「兄弟よ、（とゾロバベルは巡礼者の頬を指でかくつつきながらいった）きみは地球で生活していて、時間の持続を、あわれな人間たちの感じかたで感ずるようになってしまったのだ。人間と同じようにしゃべったり考えたりするようになんたの、ここ二十世紀前から、私はちゃんと見ているよ。おお！ 兄弟よ。なにも批判したりするのじゃないんだよ。ただ私はこう信じているし、御父だって同意見だと思

うのだが、きみは休息する必要があるし、人間界へ四度や五度旅するくらいは時間、ほかの天使を交代させておくべきなので、天国のいちばんの中央で、それともいっそ宮殿の広間で、われわれと休息する必要があると思うな。きみは

かつてわれわれのあいだで最上の音楽家だったし、コンサートできみの歌を聞いたら、みなさだめしよろこぶだろう」

「いや、いや！（と頭をたれてユリエルはいった）どういたしまして。私は地球のあわれな人間たちにかかわりがあってね。さよう、私のいるべきところは彼らのそばなのだ。しかし、御父が私の休息について考えてくださったとは、かたじけないことです」

「きみたちはみなおなじことをいう。（とゾロバベルは頭をふっていった）うむ、きみたちはみな、布教天使も、全権天使も、地上に職をもつかぎりの天使たちは、自分の職場をすてようなどとは思いません。ゾフィエルやジェロニアスやソルナイムも、同じことをいっている。人間たちのあいだではかり暮らしたために、きみたちは人間のようなこびに悩まされたり、彼らの労苦をくるしんでいる……」

「御父がわれわれにそうせよとおさとしになつたようにね」

「そう、御父が要求なされたようにね。が、かなしいかな！ 地球平和の使節たるソロナイムは、たつたいま、まだあちらで御父に会見しているがね。とてもかなしむべきことばかり申し上げるので、御父はたえず呻吟（しんげん）しては、掌上をたいておられる。兄弟よ、もう少し待ちたまえ、さすれば主は、まもなくきみにおあいくださるだろう」

ユリエルはうたいはじめた。それはどの球体

の歌でもなく、人間界を旅するあいだに天使のおぼえたゆるやかな哀歌で、彼はその歌を、好んで声をふるわせながらうたつては天界の友人たちを驚かせるのだった。彼は、うたいつかれると眠りにおちてゆき、ゾロバベルが肩をゆすりにくるまで眠りこんでしまった。

「兄弟よ、起きたがよい。（と大門守護の天使はささやいた）御父には少ししかひまはおありなさらぬが、きみにはおあいになろうとのぞんでいらつしやる」

ユリエルは、この親しい先導役について何界層も上っていった。彼はつぶやくのだった。《少ししか！ 少ししかひまがないって！ それでも私は、昼夜しゃべりつづけても一カ月では聞いていただけないほどいろいろと話すことがあるんだがなあ》

ユリエルとゾロバベルは、まず宮殿の大きな前庭を横切ったが、そのなかでは七組四十九人の舞踏天使が、最高の英知をしめす唱句を、あしゆびの先で絶えずくりかえし見えない文字にえがいていた。それから螺旋の柱の立った大広間をぬけていったが、その穹窿の下では、三組三十六人の熾天使が、頬をふくらませながら黄金のラッパをひびかせていた。やがて、いつも空虚な本堂にさしかかり、ブロンズの香炉から妙香がくゆっているのを目にした。そのつぎには半円形の入口があり、開かれた書物と唱歌隊が目に入った。やがて一人の黙した天使が願想している、透明な暗さにみちた部屋が見えた。